

## 高校生・大学生のためのグローバルキャリア入門

### Chapter10：大学生国際ボランティア経験者からの声

関西学院大学は、2003年10月に日本の大学機関としては初めて、**国連開発計画（UNDP）**の下部組織である**国連ボランティア計画（UNV）**との間で、学部生・大学院生を**国連情報技術サービス（UNITeS）**ボランティアとして派遣する協定を締結して、発展途上国へ学生を派遣してきました。現在は、国連ユースボランティアと国際社会貢献活動に発展しています<sup>1</sup>。そこで、本Chapterでは、その記録『学生たちは国境を越える』（大江、高畑、2008）から、UNITeSボランティア参加者の方々からの声を集めてみました（文章一部改）。

### スリランカの小さな村でのUNITeS ボランティア活動

（M.M.：2004年度春学期スリランカ派遣生）

私は、UNITeS ボランティア・プログラムの1期生として、2004年5月から9月までの約5ヵ月間、スリランカのマラムーラ村という小さな村に派遣されました。派遣前にUNV本部から受け持ったTOR（Terms of Reference）によると、正式な任務は以下の4つでした。

- （1）学校の子供たち（小中高生）にITの授業を提供すること
- （2）学校の子供たちの論理的思考や読み書きを向上させること
- （3）現地トレーナーを育成すること
- （4）後継のトレーナーが使用できる教材を作成すること

現地での主な業務は、一緒に派遣された他のボランティアと現地のインストラクター達と協力しながら、スタートとシャットダウンの仕方、マウス・キーボードの使い方、ワードソフトの操作など、パソコンの基本的な操作を現地の子供達に教えていました。さらに、村の小学校で小学生3～5年生に日常会話程度の英語と、算数の足し算・引き算・掛け算を教えていました。ITスキルの授業と小学校での授業を全て合わせると、週に計約20時間の授業を受け持っていました。

しかし、いくらスリランカの第二外国語が英語とは言え、現地の小学生に英語でITスキルや英語を教えるのは決して容易ではありませんでした。授業では英語を使用しましたが、ボディ・ラングゲージは欠かせないものでした。一生懸命手振り身振りで教え、時には、必要に迫られて、スリランカの母国語であるシンハラ語<sup>2</sup>を覚え、生徒に指示することもありました。

### UNITeS を振り返って

スリランカでの約5ヵ月間は喜びや感動もありましたが、失敗や反省することの方が圧倒的に多かったようです。プロジェクトのメンバーとの反省会やミーティングでは、グループ活動をする際の注意点を学べるきっかけにもなりました。自分がいかに他のメンバーや周りの人達に支えられていたか、実感することができました。忙しい日々でしたが、スリランカでは時間の流れが遅く感じられ、毎日が平穩に過ぎて行きました。そんな中、自分と向き合う時間も多かったため、色々考える時間も多くなりました。また、現地派遣機関の人々はもちろん、UNV や関西学院大学の教職員の方々への支援と協力に非常に感謝しています。短い大学生活でこのような濃い体験ができたこと、また日本では決して得られない体験が出来たことを今では貴重であったと感じると同時に、大変嬉しくも思っています。

### 国際開発支援に関心のある皆さんへ

私は、UNITeSでの任務を終えてから、関西学院大学総合政策学部を卒業してイギリスの大学院（Newcastle upon Tyne University）に進学し、「環境法と政策」を勉強しました。大学院を修了して、日本に帰国したのは



写真1. PC教室で指導する各国ボランティアたち（スリランカ）



写真2. 子供たちを指導する各国ボランティアたち

<sup>1</sup> 詳細については、関西学院大学HPをご参照ください（[http://www.kwansei.ac.jp/c\\_ciec/c\\_ciec\\_005757.html](http://www.kwansei.ac.jp/c_ciec/c_ciec_005757.html)）。

<sup>2</sup> タミル語とともにスリランカの公用語の一つ。スリランカの民族の約70%がシンハラ人です。

2007年12月でした。

自分の力を試したい人、新しいことにチャレンジしてみたい人、そして、国際協力、国際開発支援に興味を持っている人は、是非、UNITeS ボランティア・プログラムに応募してみてください。そして、現地の生活に浸ってください。気づかされるがたくさんあります。

## UNITeS を振り返って思うこと ～フィリピンで農作業を体験しながらのITボランティア活動～ (M. I. ; 2005 年度秋学期フィリピン派遣生)

私は今から2年前、フィリピンのマニラからバスで約3時間のところにあるパンパンガ地域を拠点として活動している自然農法 NGO「PBDARFI (Philippines Bio-Dynamic Agriculture Research Foundation Inc.)」に配属されました。この NGO は化学肥料を使用せず、自然を利用した循環型農業を実践、教育・普及活動をしている団体です。その活動は、月の満ち欠けを軸として農作業のサイクルが基本です。

ここでの私の仕事は、毎回のセミナーで、トレーナーが画用紙に書いて生徒に指導していた教材を、PPT (パワーポイント) で電子化したり、WEB ページやパンフレットを作成することなどでした。農作業の活動内容だけにとどまらず、働いている人がどういう思いで農業に携わっているかについて、WEB ページに反映させてほしいという要望がありました。彼らをより深く理解するために、私も、彼らと共に田んぼを耕したり、田植をしたりと、農業を実際に体験する機会もありました。



写真3. 自然農法 NGO の農園の事務所 (フィリピン)

### 国連のイメージが一変

私は現在、大学を卒業してから外資 IT メーカーに勤務し、某大手通信会社およびそのグループ会社を対象に、担当した会社のインフラを構築したり、協同で教育機関や地方自治体等の公共案件に携わっています。今では IT 業界で働く私ですが、UNITeS ボランティアに応募した当時は、IT に興味があった訳ではありません。むしろ自分で大丈夫なのかなという不安の方が強かったことを覚えています。

UNITeS に参加しようと思った動機は、より長く国際協力の現場を実際に体験したかったことです。私は国際協力を学びたくて総合政策学部に進学し、Eco-Habitat 関西学院<sup>3</sup>という、途上国の貧しい地区を対象に、そこで家を建設するお手伝いをするサークルに所属していました。そのサークルの活動で約2週間という短い期間でしたが、現地でのホームステイを経験したり、文化交流をしたりしながら、国際協力の一端を垣間見ることができました。しかし、もっと長期間にわたって現地に入りこみ、活動したいという思いを強く持っていました。しかもそれが国連のプログラムということで、国連としてどのようなアプローチをしているのかを知る大変貴重な経験だと思い、UNITeS ボランティア・プログラムに応募することにしました。

派遣先は、サークルの活動で訪れたことのあるフィリピンだったこともあり、すんなりと現地の生活に入れることができました。また、短期間の活動では見落していたことに気付くこともできました。様々な体験も通じて、大変貴重な時間を過ごすことができました。

さらに、動機の一つであった「国連が現場でどのように活動しているか？」を間近で体験できたことも大きな収穫でした。それまで「国連とはエリートばかりが集まった硬い感じの人たちが働いている」と思っていました。しかし、漠然といただいていたそうしたイメージは一変しました。国連職員の方々には非常にフレンドリーで、良い意味で軽いノリで現地の人たちはもちろんのこと、私たち学生ボランティアにも接してくれました。その一



写真4. 自然農法 NGO の農園での農作業 (フィリピン)



写真5. 作成した自然農法 NGO「PBDARFI」のWEB サイト

<sup>3</sup> 1996年に、非営利・非政府組織「Habitat For Humanity International (HFHI)」の日本最初の学生支部として、関西学院大学神戸三田キャンパスに設立されました。活動は、途上国での短期海外建築ボランティア (Global Village)、募金・啓発活動を目的とした日韓合同イベント (Cycling for Habitat)、学校や教会での活動報告会や貧困について考えるワークショップ、貧困・NGO・途上国開発に関する勉強会、街頭募金やフリーマーケットによる資金集めなどを行っています。  
(<http://www.ksc.kwansei.ac.jp/clife/circle/eohabitat/>)

方、彼らは現状を変えたいという熱い思いを持っています。国連で決められた目標に向かって、どのように解決すればいいのか真剣に話し合う場に幾度も立会いました。こうして、国連をより身近に感じられました。

### 一人一人の小さな一歩が世界を変える

UNITeS ボランティア・プログラムは、学生にとっては、またとない機会であることは間違いありません。普通ならば、大学生が国連ボランティアとして参加することはできません。関心がある方で、もし参加を迷っているならば、是非参加すべきです。自分に何ができるのだろうかと迷うこともあるでしょう。しかし、参加して初めて自分のできること、できないことがわかることもあります。また、そこで感じたことをその後活かすことや、周りに伝えていくことも重要です。

国際開発や国際協力に興味はあるけど、どうすればいいのかわからないと考えている人こそ参加してもらいたい。迷うだけで何もできないのであれば、目の前に参加できる機会があるのだから一歩を踏み出してもらいたい。それはほんの小さな一歩かもしれないけど、その積み重ねが世界を変える重要な一歩になると私は信じています。

## モンゴルでのファーストステップ ～気温マイナス 30℃ 極寒のモンゴルで日本語を教える～ (T. T. ; 2005 年度秋学期モンゴル派遣生)

社会人となった今でも、モンゴルでの4ヵ月を思い返すことがあります。私にとってモンゴルでの国連ボランティア活動は、社会人としての第一歩でありました。この活動を通して感じた事、考えた事は、現在も仕事をしていく上で忘れる事の出来ないものとなっています。

### モンゴルNGOでの活動

2005年11月、モンゴルのIT振興を目的とするNGO、MIDAS (Mongolian Information Development Association) にM.K.さん(総合政策学部卒業)と共に派遣されました。そこで任されたのがIT企業向け日本語講座の開講でした。それまで日本語を教えたことなど、もちろんありません。ましてや社会に出たことのない私達が、モンゴルのIT技術者にどうやって実用的な日本語を教えられるのか? まさに手探りの状態からスタートしました。まず現地の日本語教室を見学するなど、日本語の教え方を学ぶことから始めました。オリジナルのテキスト作りから広報活動、準備期間はあっという間に過ぎ、年が明けた1月、IT日本語講座を開講しました。全24回、48時間という言語を学ぶにはあまりにも短い期間の中、できるだけ受講者にとって楽しく、有意義な講座となるよう試行錯誤を繰り返しました。

受講者の日本語を学ぼうとする意欲は凄まじく、短い期間であったのにも関わらず、簡単な文章で自分の意思を表現できるほどまで上達しました。「将来日本とビジネス関係を作りたい。日本語を学ぶことは、そのファーストステップになる」そう話してくれた受講生の言葉は忘れる事が出来ません。

### 熱い思いに触れて

モンゴルのNGOで現地の方と一緒に仕事をしていると、彼らの「モンゴルをもっと発展させよう」、「自分の力で何か変えよう」という熱い思いがひしひしと伝わってきました。朝から晩まで様々な会議に出席し、世界中、モンゴル中を飛び回る上司、仕事を二つ掛け持ちしつつ日本語講座無欠席の受講生、一九歳でネットワークエンジニアとして活躍する学生、自分も彼らに負けまいと必死で仕事に打ち込みました。しかし、気持ちとは裏腹に自分の専門性、力のなさを痛感することも多々ありました。ボランティアだからといって、何でも自分がしたい事をすれば良いのではなく、本当に相手が必要としているものは何か、そのために自分に何が出来るのかを常に考えて行動することが必要だと思います。そのため、自分に何かしらの専門的知識、経験があれば、より幅広いボランティア活動が出来たのではないかと強く感じました。

### 現在の仕事や課題

帰国後すぐ大学を卒業し、ガスを専門とする商社に就職しました。現在はLPG(液化石油ガス)の輸入を担当しています。ガスを輸入するためには、産ガス国や各国のトレーダーと交渉、調整しなければならないことも多く、迅速で柔軟な対応が求められます。「海外と関わる仕事」であるため、モンゴルでの経験は仕事を進める上での自信となっています。しかし、モンゴルで感じた「専門性を身に付けること」「経験を積むこと」の大切さを忘れずに、国際舞台で活躍できる人材を目指して日々努力しています。



写真6. NGO スタッフとオフィスにて (モンゴル)



写真7. IT 日本語クラス (モンゴル)

モンゴルでのボランティア活動を通し、本当に多くのことを学ばせてもらいました。現在、仕事をしている中で、思い通りにいかないこと、辛いことは確かにあります。そんなときは社会人としての一步を踏み出したモンゴルでの活動を思い返し、自分を奮い立たせるようにしています。モンゴルで受けた刺激の一つ一つが、今後何十年と働くための原動力となっている事は間違いありません。

## NGO Academic Link～先輩の成果を引き継いでさらなる開発に従事した5ヵ月間～ (M.O. ; 2006年度秋学期モンゴル派遣生)

私は2006年10月から2007年3月まで、モンゴルのNGOであるアカデミックリンクに派遣されていました。このローカルNGOは、JICAが2001年から2004年にかけて、モンゴルの教育IT支援として行っていた「サクラ・プロジェクト」を担っていました。サクラ・プロジェクトは、その後も、このNGOによって活動が続けられ、モンゴルの都市と地方における情報格差を縮小し、地方における情報通信技術（ICT）の教育環境向上に取り組んでいます。

私は、このプロジェクトの一環として、モンゴル語版教育アプリケーションソフトの開発に取り組みました。このアプリケーションソフトは、サクラ・プロジェクトを通じて、モンゴルの学校に配布されたリナックス搭載のPCにインストールするためのものです。私が派遣される以前に、すでに63校700台の配布実績がありました。リナックスとはMicrosoft社のウィンドウズ（Windows）のようなオペレーティング・システム（OS）の一種で、自由に使用、配布、開発できることが大きな特徴です。過去にモンゴルに派遣された関西学院大学UNITeSボランティア・プログラムの派遣生が、リナックスのモンゴル語化に成功していました。そのモンゴル語版リナックス上で使用できる教育用アプリケーションソフトを探し、そのモンゴル語化をすることが私たちの業務でした。

派遣期間中には、アプリケーションのモンゴル語化作業だけでなく、過去に配布されたPCのモニタリング調査のために地方へ出張する機会がありました。また、自分たちが開発したモンゴル語版リナックスを広めるために、セミナーを開催するなど、多くの貴重な経験をする事ができました。

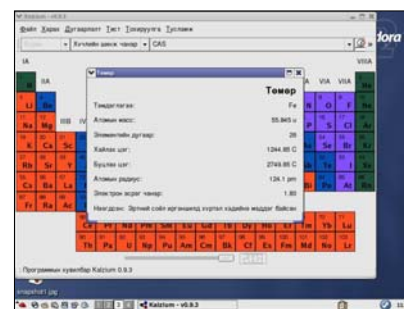


写真8. モンゴル語化した化学記号ソフトウェア

### 帰国後すぐにIT関連部門に就職

4回生の秋学期に派遣されていた私は、卒業式の直前にUNITeSボランティア・プログラム派遣を終え、帰国後間もなく、金融機関のIT部門に就職しました。現在は東京で働いています。社会人一年目ということもあり、また私自身研修中のため特定の業務には就いていません。しかし、職場はITインフラ全般に渡る幅広い業務内容で国際的な環境のため、UNITeSボランティア・プログラム派遣で培った経験や、知識を活かす機会が多いと感じています。

UNITeSでの経験は、私にとって、とても貴重で有意義なものでした。派遣期間中は毎日があっという間に過ぎ、派遣の意義や自分に対する影響を振り返る時間も余裕もなかったように思います。今振り返ってみて改めて思うことは、派遣期間は、毎日がとても充実しており、楽しかったということです。

もちろん、異国の地で働くということは、簡単ではなく、自分の考えているとおりに事が進まないこともありましたが、しかし、派遣を通して社会で働くということの難しさとともにその大切さを学んだように思います。

### 志を高く、柔軟な気持ちで挑戦を

UNITeSボランティア・プログラムへの参加を希望される皆さんは、高い志を持って参加されることが多いと思います。先に述べたように、UNITeSボランティア派遣は充実したプログラムで有意義だったと言えます。

しかし、派遣期間中は楽しい事ばかりではありません。派遣される国は、普段私たちにとってなじみのない国が大半です。それゆえに、自分の慣れ親しんできた環境とは異なる環境に適応する事に、戸惑う事もあるかもしれません。また、派遣された機関の方と協力しながら、プロジェクトにおいて成果を挙げる事も求められます。

これから応募される方、派遣される方にはそれらの困難さえも楽しい、面白そうだと思うような人であってほしいと思います。志は高く、常に柔軟な気持ちを持って、多くの人たちに挑戦していただけたらと思います。

### 引用文献

大江瑞絵・高畑由起夫『学生達は国境を越える』関西学院大学出版会、2008。

2018年3月

編集：関西学院大学総合政策学部・関西学院千里国際高等部